氏　　名　**高　橋　京　子**

学 位 の 種 類　博士（社会学）

学位授与年月日　2008年９月12日

学位論文の題名　**日本とインドにおける疱瘡治癒祈願の舞踊研究**
―グラフノーテーションによる動作分析を中心に―

【論文内容の要旨】

１．本論文の構成

第１章　序章
　１・１　序論　　１・２　研究目的　　１・３　研究意義　　１・４　先行研究
　１・５　研究仮説
第２章　方法論
　２・１　語義規定　　２・２　調査対象　　２・３　研究方法
第３章　日本における疱瘡治癒祈願の舞踊―鹿児島県の疱瘡踊りを事例に
　３・１　疱瘡踊りの概要　　３・２　疱瘡踊りの構造
　３・３　グラフノーテーション分析①―入来町
　３・４　グラフノーテーション分析②―三島村硫黄島　　３・５　まとめ
第４章　疱瘡踊りとその背景
　４・１　日本における疱瘡の流行　　４・２　疱瘡神信仰の背景
　４・３　疱瘡踊りと「ケガレ」の概念
第５章　インドにおける疱瘡治癒祈願の舞踊―ケーララ州の疱瘡神の舞踊を事例に
　５・１　疱瘡神の舞踊の概要　　５・２　疱瘡神の舞踊の構造
　５・３　グラフノーテーション分析③―カンダカルナン
　５・４　グラフノーテーション分析④―ヴァスーリマーラ　　５・５　まとめ
第６章　疱瘡神の舞踊とその背景
　６・１　テイヤム儀礼の概要　　６・２　疱瘡神信仰の背景
　６・３　疱瘡神の舞踊と「ケガレ」の概念
第７章　結章
　７・１　グラフノーテーションによる疱瘡治癒祈願の舞踊の比較
　７・２　日本とインドの疱瘡治癒祈願の舞踊の背景
　７・３　総括　　７・４　研究の限界と今後の課題
謝辞　引用・参考文献

２．本論文の要旨

本論文は，疱瘡が撲滅された現在においても，疱瘡治癒祈願の舞踊が踊られていることに着目し，日本とインドで踊られている舞踊を対象に，舞踊と社会および文化との関係を浮き彫りにすることを試みたものである。日本とインドの舞踊を比較する主な根拠は，前田（2003）が，日本の芸能（特に伎楽）の原点は，インドやチベットが考えられる，と述べ，姫野（2004）は，インドの芸能は，日本や東洋の舞踊と共

通性がある，と指摘しているからである。インドの舞踊は，アジアの舞踊を理解する上で必要であると同時に，インド社会を理解する上でも欠かすことができないものであり，日本の舞踊特性を探る手がかりともなる。このような研究意義があるにもかかわらず，日本とインドの舞踊は，これまであまりシステマティックに研究が行なわれてこなかった。さらに，川田（1988）は，文字という物質化されたしるしに外在化し，固定する行為の対極に，踊る行為がある，と指摘するごとく，舞踊は，文字で表現することがむずかしい側面を有している。また片岡（1991）は，舞踊現象の核には，イメージ，リズムの融合した「感じのあるひと流れの動き」（舞踊動作の核）が鼓動し，民族性，地域性，時代性，個性等を背景に多様な舞踊を開花させた，と述べているが，これまでの研究史において，舞踊動作の核を中心にすえた舞踊研究も欠如している。

そこで著者は，舞踊動作の核に焦点をあて，鹿児島県の疱瘡踊りと南インドケーララ州のテイヤム儀礼で踊られる疱瘡神の舞踊を研究対象にしながら，文字で表現することに加えてグラフノーテーション（舞踊記譜法の１つ）を用いて舞踊を記号化し，動作の核を明らかにし，その核と社会および文化とのかかわりを考察しようとしている。本論文の大きな意義は，まさにこの点に求められる。さらに，著者は，疱瘡治癒祈願の舞踊には，疱瘡という奇異な病はなんらかの「ケガレ」とかかわっており，疱瘡治癒祈願の舞踊もまた「ケガレ」とかかわって踊られているのはないか，という仮説にたちながら検討している。この点は，本論文のユニークで斬新な点である。著者は，2000年～2008年，日本とインドにおいて舞踊人類学的なフィールドワークを行い，舞踊を映像記録し，その記録をもとに舞踊をグラフノーテーションによって記述・分析し，あわせて文献研究を行なった。著者の主な結論としては，１．日本における主な舞踊動作の核は，女性の踊り手が，まねくような手の動き＝「まねき手」を行なう　２．１の動作は，伊勢の神や疱瘡神を招き，踊りによって神をもてなした後，神を送る意味がある，と考えられる　３．インドにおける主な舞踊動作の核は，男性の踊り手が，下肢のリズミカルな動作を行なう　４．３を踊ることによって踊り手が疱瘡神になると考えられる　５．両者の舞踊には，「ケガレ」である疱瘡とその疱瘡神を祓うという意味が込められている　等が示された。最後に著者は，疱瘡が撲滅された現在においても，この舞踊が踊られるのは，人々の中に疱瘡は「ケガレ」であるという潜在意識があり，踊らないと疱瘡が再び蔓延すると信じられ，疱瘡の「死の脅威」と戦うためにも，この舞踊が踊り続けられているのではないか，と締めくくっている。

３．各章の要旨

第１章では，研究目的，意義，先行研究，仮説が提示されている。その目的は，第１に，日本とインドにおける疱瘡治癒祈願の舞踊を対象にし，舞踊の表現特性を明らかにすること。第２に，その舞踊が社会および文化とどのようにかかわり，どのような意味があるのか，を示すこと。第３に，疱瘡が撲滅された現在においても，なぜ疱瘡治癒祈願の舞踊が踊られ続けるのか，その理由を明らかにすること，である。日本とインドの舞踊を対象にする主な理由は，アジアの舞踊を理解する上で，またインド社会を理解する上でも重要であり，日本の舞踊特性を探る手がかりになるからである。具体的な研究対象は，日本では鹿児島県薩摩半島に伝承される疱瘡踊り，インドではケーララ州北部に伝承されるテイヤム儀礼で踊られる疱瘡神の舞踊である。次に研究方法は，2000年～2008年，日本とインドにおける舞踊人類学的なフィールドワーク，舞踊記譜法の１つであるグラフノーテーションによる舞踊の記述・分析，そして文献研究である。研究の意義は，インドの舞踊は，アジアの舞踊を理解する上で欠くことができないものであると同時

にインド社会を理解する上でも欠かすことができないし，さらには日本の舞踊特性を探る手がかりとなるともなる。このような意義を持つにもかかわらず，日本とインドの舞踊研究は，これまでシステマティックに行われてこなかった。先行研究に関しては，鹿児島県の疱瘡踊りとケーララ州のテイヤム儀礼で踊られる疱瘡神の舞踊に関する研究，病気の治療儀礼と民族舞踊に関する研究，民族舞踊を対象に動作分析を用いた研究等のジャンルを網羅的に調べ，疱瘡治癒祈願の舞踊に関する研究動向を考察し，舞踊の根幹とも考えられる舞踊動作の核を分析しながら社会および文化について論じた研究が欠如していることを示している。

第２章では，方法論を述べ，語義規定，調査対象地，研究方法等について示している。舞踊の語源や概念を検討したうえで，本論文における疱瘡治癒祈願の舞踊とは，疱瘡という病を治すこと，疱瘡という病に罹患しないよう願うこと等，疱瘡から遠ざかることを目的とし疱瘡神に祈願する形式をとり，今も伝承されている舞踊，と定義している。さらに，舞踊の分析に際して「ケガレ」の概念を用いて考察するため，それについても検討している。「ケガレ」に関する主な研究としては，「ケ」「ハレ」「ケガレ」を論じた波平，「本質的に無秩序」，「場違いなもの」等と考えるメアリ・ダグラス，タミル社会の不可触民について人類学的調査を行なった関根等の考えを参考にしながら，本論文における「ケガレ」とは，波平の三項対立的概念に準拠しつつ，悪，病気，不浄性等を示唆し，「死の脅威」を喚起し，排除も受容もされる両義的なものと広義に定義している。

第３章と第４章では，鹿児島県の６地域（現さつま町柏原，現さつま町求名，入来町，日吉町，大浦町，三島村硫黄島）で踊られている疱瘡舞踊を概観し，舞踊の空間構成，構造分析，衣装，持ち物，歌詞，宗教等様々な観点から比較検討し，その意味について論じている。概観した結果，薩摩半島の北部地域と南部地域において相違がみられた。そこで北部から①入来町，南部から②三島村硫黄島を抽出し詳しく検討した結果，①では祝い事として，②では神事の場で踊られ，御幣，扇子を用い，疱瘡，疱瘡神に触れた歌詞，伊勢の神に関する歌が歌われる。①では，伊勢の神を招く動作である「まねき手」が，舞踊動作の核と考えられ，それは伊勢の神を送る意味もあり，疱瘡神を招く「まねき手」は，疱瘡神を送るつまり疱瘡を祓う意味が込められている。②においても「まねき手」や御幣を振るマイム的な動作が舞踊動作の核と考えられ，「伊勢の神，疱瘡神を招き，両者を送る」という意味が込められている，とする。病気をもたらす祟り神は「ハレ」ではなく，「ケガレ」の範疇に含まれるとする波平の見解を援用すれば，疱瘡神は「ケガレ」であり，その舞踊動作も「ケガレ」に繋がり，その神を送ることによって，「ケガレ」である疱瘡そのものを排除しようとしていると考えられる。日本の疱瘡治癒祈願の舞踊においては，踊り手が「まねき手」によって神々を招き，踊ることによって神をもてなし，最後に神を送る（つまり疱瘡や疱瘡神を祓う）という両義的な意味が読み取れる。

第５章と６章では，インドのケーララ州における疱瘡神の舞踊を対象にし，舞踊特性を抽出し，その意味について論じている。対象とするのは，③カンダカルナン，④女神ヴァスーリマーラの舞踊である。③では神になる準備として，踊り手が最初に地面を踏む動作がある。踊り手は，音楽と共に，疱瘡を治す神の威力を表現し，円運動をベースにして踊る。インド舞踊の円運動は，動きを止めることなく重心の移動がスムーズに行なわれ，これを絞り込んでいくと球運動になり，そこに発生する遠心力または求心力を利用して人は自分より偉大な力を発揮する，とする姫野の見解をもとに著者も，カンダカルナンの舞踊（円運動）にも同じような偉大な力が発揮されるのではないか，と述べている。④では，踊り手が神話とかかわり女神になる動作があり，舞踊の中盤では疱瘡神は疱瘡のもつ「ケガレ」（死の脅威）として表現されて

いる。インドの舞踊動作の核としては，体幹を曲線的に動かし，上肢で表示的な動作を行い，下肢でダイナミックに地面を踏むことが指摘できる。踊り手は，このような舞踊を踊ることによって疱瘡神になると考えられる。また③の中盤では，衣装が燃やされる場面がある。これは疱瘡を治す神の威力を表現し，燃やす行為自体は，疱瘡のウィルスが原因の大気中の不浄を取り除くとも考えられることから，疱瘡の「ケガレ」が祓われることを表現していると思われる。④では，疱瘡神が疱瘡の「ケガレ」を表現していると考えられる。また，④では疱瘡を与える神が同時に疱瘡を治す神であるという両義性を指摘することができる。インドの疱瘡治癒祈願の舞踊では，踊り手が踊ることによって疱瘡神となり，疱瘡の「ケガレ」や疱瘡を治癒する威力を表現していると考えられる。

第７章では，日本とインドの舞踊を１．舞踊動作，２．踊られる場，３．衣装・持ち物，４．踊り手，５．疱瘡神信仰等の観点から比較検討している。それらの要点は次のとおりである。１．舞踊動作：主な共通点は，マイム的な動作をとおして様々な意味を伝達していること，主な相違点は，日本では舞踊動作の核が直線的でスタティック，インドでは曲線的でダイナミックであることである。２．踊られる場：日本では祝い事や神事で踊られ，赤不浄（月経），黒不浄（死）にかかわる女性は踊ることができず，衣装等にも触れることができない。インドでは，年ごとのテイヤム儀礼の中で踊られ，神に扮する踊り手は，一定期間潔斎をおこなう。３．衣装・持ち物：日本では伊勢の神と疱瘡神を招き，踊りでもてなしたあと神を送るために御高祖頭巾，シマダ，神聖な白い布等の衣装，御幣を使用するが，これには「ケガレ」である疱瘡，疱瘡神を祓うという意味が込められると考えられる。インドでは，疱瘡神を表現するために腰蓑を身につけ，化粧をし，パンダン（トーチ）を持ち，時にはターメリックを使用するが，姫野が指摘するように腰蓑が疱瘡を治す神の威力を化粧が疱瘡神を表現し，衣装を燃やす行為が「ケガレ」である疱瘡そのものを祓うことを意味していると考えられる。４．疱瘡神：日本における疱瘡神は，祟り神でもあると同時に守り神であるという両義的な神であるため，人間に招かれた後に送られると考えられる。インドの疱瘡神は，治す神（男神）と与える神（女神）がおり，共にシヴァ神から生まれたという神話に基づいている。疱瘡を与える女神が，疱瘡治癒効果のあるターメリックを与える行為をも行なう。このことから，女神は両義的な性質を有する神とも考えられる。５．踊り手：日本では女性である。それは，①．疱瘡に罹るのは母親の不摂生等によって胎毒が生じ，胎児の毒になるとため女性が必死の思いで踊り祈願したこと　②．神に踊りや歌をささげる女性は，神妻としての巫女であり，聖性をもった女性として特別視され，エクスタシーの技術をもって病気治療にあたること　③．月経や出産という女性のもつ「ケガレ」が，男性にはない力があるからである。インドでは不可触民カーストの男性である。関根が，不可触民の特殊な社会的位置を「両義的な力を秘めた存在，つまり「ケガレ」」と述べているように，劣位に置かれた不可触民カーストの男性は「ケガレ」視され，それは死や悪とかかわりコントロール不可能な逸脱した人間が社会や文化を活性化するエネルギーにもなる。このようなエネルギーを持った人々が，疱瘡に対抗する力を持っている，と思われる。また踊り手が行なう潔斎は，シャーマンとしての神聖な存在つまり「ハレ」への準備とも考えられる。日本とインドに共通する踊り手の立場は，巫女やシャーマンという神にかかわる宗教職能者の役割を担っている。これは，「ハレ」の立場になるが，女性も不可触民も劣位化され，「ケガレ」の立場でもある。したがって踊り手は，「ハレ」と「ケガレ」の性質を帯びた両義的な立場であると考えられる。

著者は，疱瘡撲滅された現在において疱瘡治癒祈願の舞踊が踊られる理由として，疱瘡は「ケガレ」であるという意識が潜在的に我々の中にあり，踊らないと疱瘡が再び蔓延すると思われ，疱瘡の「死の脅威」

と戦うためにもこの舞踊を踊り続けている，と述べている。

最後に，研究の限界と今後の課題が述べられている。限界は，１．舞踊の動作は，踊り手や踊られる場によって微妙に異なるため，舞踊動作の核の基準が一定していないこと　２．西洋音符によって民族音楽を分析することが困難であることを指摘している。課題としては，舞踊をデジタル記録し，それによって舞踊をより客観的に分析することが可能になったこと，舞踊と医療との関わりに関する深化した考察などを指摘している。

【論文審査の結果の要旨】

本研究は，次の点において高く評価しえる。

第１に，先行研究が少ない中，数年にわたるフィールドワークをもとに，極めて豊富かつ貴重なデータ収集を行ない，それらを詳細に分析している。この意味において本研究は，この分野での今後の研究にとってベースとなる先駆的および独創的な意味を有し，今後の研究発展の大きな可能性を含んでいる。

第２に，グラフノーテーションという舞踊記譜法を駆使して，文化内在的に舞踊と社会および文化との関係を明らかにしている。特に，グラフノーテーションによる数多くの舞踊の採譜と，そこから導き出された上肢によるまねき手や下肢のリズミカルな動作を「舞踊動作の核」として抽出し，その「舞踊動作の核」と音楽，踊られる空間，宗教等々との関連を浮き彫りにしている点に，本研究の重要な特色がみられる。フィールドワークを通して日本とインドの舞踊に直接接し，そこで感性的，知性的に感じ取り，同時にそれらを図表化しさらに言語化していく手法によって抽出した「舞踊動作の核」という点を機軸にすえるからこそ，舞踊と社会および文化とのかかわりの重層性を，文化内在的であると同時に外在的な社会や意識との関係を示しえたと考えることができる。

第３に，日本とインドにおける舞踊と社会および文化をシステマティックに比較研究している。先行研究において日本の舞踊は，インドの舞踊とかかわっていると指摘されてきたが，それがどのようにかかわっているのか，等についてはあまり研究が行われてこなかった。この意味において，本論文は，意義深いものである。

第４に，疱瘡治癒祈願の舞踊を「ハレ」と「ケガレ」の概念を用いることによって，より鮮明に説明している。例えば，日本では女性インドでは男性という踊り手に着目すれば，両者には巫女やシャーマンという神にかかわる宗教職能者の役割としての「ハレ」の立場と同時に，女性も不可触民も劣位化された「ケガレ」の立場もあるように，踊り手は「ハレ」と「ケガレ」の性質を帯びた両義的な立場があると考えられる等。

第５に，疱瘡が撲滅された現在において，疱瘡治癒祈願の舞踊が踊られ続けている理由を明らかにしている。疱瘡は「ケガレ」であるという意識が潜在的に我々の中にあり，踊らないと疱瘡が再び蔓延すると思われ，疱瘡の「死の脅威」と戦うためにもこの舞踊を踊り続けている，と述べている。

このように全体としては優れた諸点があるにもかかわらず，いくつかの課題も残されている。

第１に，本研究は，日本とインドにフィールドを絞っているとはいえ音楽，身体訓練，宗教等多岐にわたり，介在する要因を探らざるを得ず，広範な問題を当初より含んでいる。それゆえしばしば論点を盛り込みすぎている傾向がみられ，あまり深く考察がなされず十分に追及されない面がみられる。例えば，インドの舞踊がカラリパヤットとかかわっているというものの，どのようにかかわっているのかが不鮮明になっている。

第２に，舞踊動作の核として抽出されているものと，日常的な身体技法との接点についてあまり明確でないことがあげられる。それゆえ，動作の核と社会的な脈絡とのかかわりに関しては，歴史的な変遷も踏まえて，概念的な整理を行う必要があったと思われる。

第３に，舞踊と音楽は密接に結びついているため，本論文では音符による採譜を行い，舞踊動作とのかかわりについて言及している。しかしながら，リズムが流動的で明確に区切れることがむずかしい点で，また西洋音楽の視点にたつ音符によって民族音楽を採譜した時点ですでに課題を含んでいる。

第４に，「ケガレ」の概念をもう少し整理する必要があったと思われる。主要な研究者の論を踏まえているとはいえ，日本とインドの社会および文化の相違を考慮した「ケガレ」の概念を提示すべきではなかった，と思われる。

上述したようにいくつかの点で深化した検討が必要ではありながらも，本論文は，数年にわたるフィールドワーク，幅広い文献の渉猟による豊富かつ貴重な資料をもとの考察，文化内在的視点による手法などの点で優れた論文であり今後のこの研究領域を深めていくベースとなる極めて先駆的独創的な研究意義を持つものと評価し得，審査委員会は学位授与するに十分に値すると認め，本学学位規程第18条第１項に基づき，学位を授与することが適当であると判断し得るものである。

【試験または学力確認の結果の要旨】

審査委員会は，学位論文を精読し，公聴会（2008年６月27日開催）での質疑を踏まえ，著者が十分な専門知識と，豊かな学識を有すること，また外国語文献の読解においても優れていることを確認した。

以上から，審査委員会は，本学学位規程第18条第１項により，本論文が「博士（社会学）立命館大学」を授与されるに十分な水準にあると判断する。

審査委員　（主査）遠藤　保子　立命館大学産業社会学部教授
（副査）池内　靖子　立命館大学産業社会学部教授
（副査）仲間　裕子　立命館大学産業社会学部教授